



Title	スロヴェニアにおける政党政治とポピュリズム : スロヴェニア社会民主党の右派政党化をめぐって
Author(s)	齋藤, 厚
Citation	スラヴ研究, 52: 39-61
Issue Date	2005
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/39070
Type	bulletin (article)
File Information	52-002.pdf



[Instructions for use](#)

スロヴェニアにおける政党政治とポピュリズム

—スロヴェニア社会民主党の右派政党化をめぐる—

齋藤 厚

はじめに

本稿は、2004年10月のスロヴェニア議会選挙に勝利し政権党となった、スロヴェニア民主党 Slovenska Demokratska Stranka (SDS) に関するものである。この党は同選挙の以前は、スロヴェニア社会民主党 Socialdemokratska stranka Slovenije (SDS) の名称を冠し、議会における野党第一党であった。社会民主党は1989年、反体制の左派知識人、労働者らによって結成され、他の新政党とともにスロヴェニア民主野党連合 DEMOS を組織して、スロヴェニアの体制転換および旧ユーゴ（ユーゴスラヴィア社会主義連邦共和国）からの独立を主導した。社会民主党は、1992年4月に DEMOS 政権が崩壊すると、今度は旧共産主義者同盟系の諸政党と協力関係を結んで連立政権を樹立した。1992-93年当時の社会民主党は社会民主主義政党として、路線的に近い旧社会主義労働人民同盟（共産主義者同盟傘下の大衆組織）の社会党との合同を視野に入れていた⁽¹⁾。

しかし1994年に入ると、社会民主党は路線を大きく変更した。同年3月、党首ヤンシャ Janez Janša の国防相解任によって連立政権から離脱すると、同政権を批判するのみならず、反共主義、民族主義に訴え始めたのである。以後、右派政党と見なされるようになった社会民主党は、独立後、体制変動後の境遇を不満とする社会層の支持を集めて、党勢を拡大した。この社会民主党の右派路線は、いわゆる極右と中道との間で揺れており、旧体制的要素の一扫以外に一貫した主張はない。しかし、この主張が社会的不満層の支持を集め続け、社会民主党は過去十年、議会において勢力を維持することに成功してきた。

本稿は、社会民主党がスロヴェニア民主党となる以前に起こしたこの右派政党化をめぐる、それがいかなる理由から発生し、どのような背景から成功、定着したのかを明らかにするものである。なお筆者は、社会民主党（以下、この旧党名に記述を統一）を敢えて民族主義政党とは呼ばないが、それは、同党の右派路線が民族主義以外の要素も有しており、かつ、民族主義が同党にとり、目的というよりも支持獲得の手段だからである。先行研究との関連では、スロヴェニアおよび欧米諸国において、党首ヤンシャのデマゴグ性に焦点を当てた議論がいくつか存在する⁽²⁾。しかし、本稿のごとき切り口から、社会民主党やスロヴェニア政党政治を扱った研究はなく、スロヴェニアにおいてはそれ以前に、

1 Igor Lukšič, *Politični sistem Republike Slovenije* (Ljubljana: Znanstveno i publicistično središče, 2001), p. 40.

2 例えば、次の文献。Rudi Rizman, “Radikalna desnica na Slovenskem,” *Teorija in Praksa* 35:2 (1998), pp. 249-270; Patrick Moore and Stan Markotich, “Slovenia: Progress, Problems — and Some Squabbling,” *Transition* 1:1 (1995), pp. 64-66; Stan Markotich, “Voters Take a Right Turn,” *Transition* 2:25 (1996), pp. 44-45.

なぜ右派の政党が社会民主党という名称を冠するのか、という基本的な問題さえ議論されてこなかったのである³⁾。

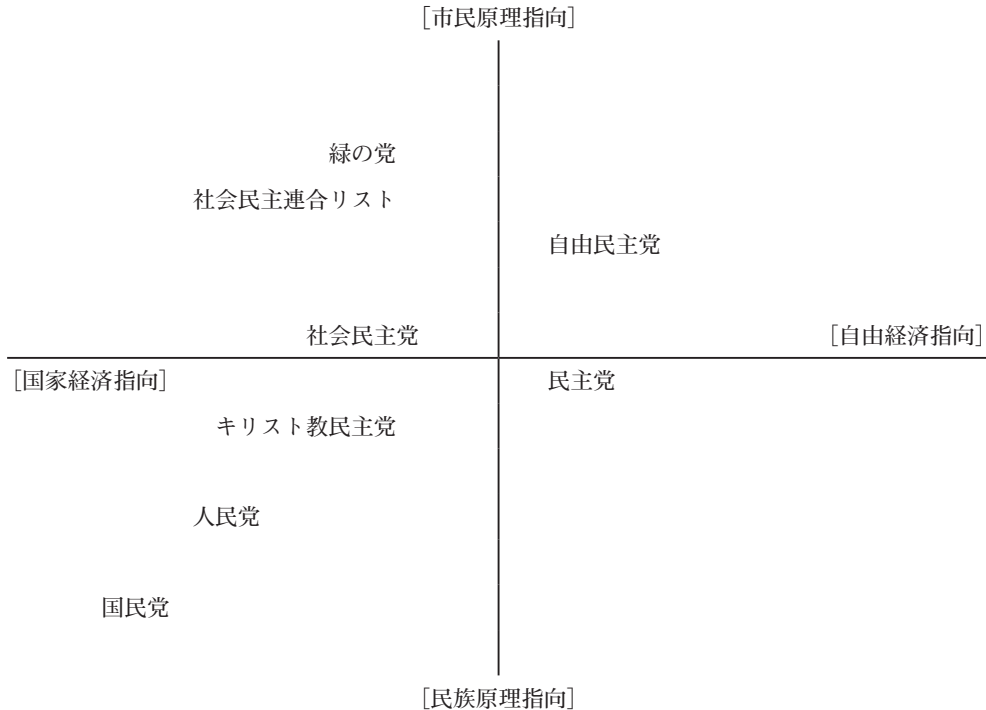
以下では、まず、スロヴェニアの政党政治における、各政党間の対抗関係を検討する。この作業を通じ、本稿で用いる右派、左派、中道が、具体的に何を意味するのかを明らかにする。続いて、体制変動以来のスロヴェニアにおける政党政治の構図と、そこにおける社会民主党の行動の変化を浮き彫りにし、その上で、社会民主党右派政党化の理由および背景について検討することにする。本稿が扱うスロヴェニアの社会民主党の事例は、スロヴェニアにおける独立以来の政治動向を把握する上でも、また、体制変動後の旧ソ連・東欧諸国で見られた、プロフィールが曖昧な政党が大きく得票した現象⁴⁾と比較する意味でも、興味深い素材であると思われる。

1. スロヴェニア政党政治における右派、左派、中道

スロヴェニアにおいては複数政党制が導入された当初、諸政党間の対抗軸は、共産主義者同盟系の政党か、それとも、共産主義支配に反対する新勢力かであった。冒頭に述べた DEMOS は、後者のうち主要な政党が組織した連合体であったが、政権交代、旧ユーゴからの独立という共通目標を達成すると、間もなく本来の構成要素に分解した。以下図1は、DEMOS の分解、および、1992年12月の選挙を経た、議会における政党分布の図示を試みたものである。縦軸にとったのは市民原理指向と民族原理指向の強さであり、EU・NATO加盟問題に対する姿勢や、少数民族問題、特に旧ユーゴ他共和国出身の移民・難民問題に対する態度を基準としたものである。また、横軸にとったのは経済政策における自由主義指向と国家（介入）主義指向の強さであり、市場経済への転換、民営化、外国資本導入などに積極的であるか慎重であるかを基準としたものである。

-
- 3 この問題に関し、1994年に社会民主党に入党し同党のイデオログとなったズヴェル Milan Zver は、次のように説明している。1) スロヴェニア民族の強調に関し、スロヴェニアにおいて19世紀末以来展開されてきた社会民主主義運動では、スロヴェニア民族の存続を危惧する立場から、他国の同様の運動とは異なり、国際主義よりも民族性の重要さの方が強調されてきている。また、スロヴェニアの社会民主主義運動はそもそも、国際主義、革命主義の共産主義運動とは異なる。2) 政党の分類に関し、資本の集中を指標にするならば、議会制民主主義の伝統が長い国においては右派が資本家、左派が労働者という図式になるが、旧共産圏諸国においては、資本も政治的特権も旧共産主義勢力からなるいわゆる「移行期左派 (tranzicijska levica)」の方に集中してしまっている。「移行期右派 (tranzicijska desnica)」に属する社会民主党は、こうした「移行期左派」による統治の継続に反対する。Milan Zver, *100 let socialdemokracija* (Ljubljana: Veda, 1996); “Program SDS,” <http://www.sds.si/program/resolucije05.html> (2004年4月16日アクセス) しかし、1) に関し、スロヴェニアの歴史上の社会民主主義運動と今日の社会民主党がイデオロギー的のどのような継承関係にあるかは不明であり、少なくとも人的側面と組織面では実質的な継続性はない。また2) に関し、こうした分類に対する評価が、スロヴェニアの政治学者の間では為されておらず、彼らは主として民族主義の面から、政策と党名の不一致にしばしば言及しつつ、社会民主党を右派に分類している。
- 4 1993年12月のロシア議会選挙において、ジリノフスキー率いる自由民主党が大きく得票した例（「ジリノフスキー現象」）、議会選挙ではなく大統領選挙であるが、1990年11～12月のポーランド大統領選挙において、無名候補ティミンスキが大きく得票した例（「ティミンスキ現象」）など。森下敏男「一九九三年ロシア議会選挙の経過と結果」木戸籍・皆川修吾編『講座スラヴの世界⑤ スラヴの政治』弘文堂、1994年、159-162頁。および、伊東孝之「ティミンスキ現象」伊東孝之、直野敦、萩原直、南塚信吾監修『東欧を知る事典』平凡社、1993年、292-293頁。

(図 1) 1992 年 12 月選挙後の議会における政党分布



(出典) 伊東孝之「東欧諸国の議会と政党」伊東孝之編『東欧政治ハンドブック 議会と政党を中心に』日本国際問題研究所、1995年、14-16頁；Niko Toš et al., *Slovensko javno mnenje 1994/2* (Ljubljana: FDV- Centar za javno mnenje in množično komunikacije, 1994)；Samo Kropivnik, “Voting Behavior in Slovenia,” Samo Kropivnik, Igor Lukšič, Drago Zajc, eds., *Conflict and Consensus: Pluralism and Neocorporatism in the New and Old Democracies* (Ljubljana: Slovensko Politološko Društvo, 1997), pp.77-88. を参考に筆者作成。

図中の政党のうち、選挙後に政権与党となったのは、上から順に社会民主連合リスト（旧共産主義者同盟）、自由民主党（旧社会主義青年同盟）、社会民主党（新政党）、キリスト教民主党（新政党）である。なお、左下隅の国民党は党内の路線対立から1993年1月に分裂し、また、緑の党と民主党は1994年3月に自由民主党に合流している⁵⁾。

以上の図では、多くの政党が経済政策において自由主義よりも国家（介入）主義を指向している点の特徴的である。その理由としては、自国の経済レベルに対する自信、旧ユーゴ時代の自主管理社会主義経済に対する信用⁶⁾、および、外国資本の進出による、スロヴェ

5 Drago Zajc, “Parliament of Slovenia: Democratic Pluralism and Forming of Coalitions,” Samo Kropivnik, Igor Lukšič, Drago Zajc, eds., *Conflict and Consensus: Pluralism and Neocorporatism in the New and Old Democracies* (Ljubljana: Slovensko Politološko Društvo, 1997), p. 94.

6 スロヴェニアの一人当たりGDPは、EU内の南欧諸国と同じレベルである。スロヴェニアでは、そうした経済発展を生んだ旧ユーゴの自主管理社会主義経済は必ずしも否定視されておらず、民営化の検討が開始されると、労働者自主管理企業が私人の手に渡ることに反対する動きが生じた。Kenneth Zapp, “The Economic Consequences of National Independence: The Case of Slovenia,” *International Journal of Politics, Culture and Society* 7:1 (1993), pp. 63-65.

ニア経済の自立性喪失に対する危惧⁽⁷⁾、が挙げられる。また、EU加盟問題に関しては、各党とも加盟に原則賛成である。それらのうち、民族原理指向の強い政党は、脱ユーゴ・入西欧の立場からスロヴェニアのEU加盟を主張するが、加盟交渉に当たっては、スロヴェニアの国益は守られなければならないとする。一方、市民原理指向の強い政党は、EUへの加盟実現に向けた着実な接近を唱えており、また、旧ユーゴ諸国との協調についても肯定的である⁽⁸⁾。

スロヴェニア議会においては、緑の党、民主党が自由民主党に合流した1994年以降、主要政党の顔ぶれは変わっていない。また図において、同年以降社会民主党が左下方に移動している以外に、各政党の位置にも大きな変化はない⁽⁹⁾。スロヴェニアでは、市民原理指向か民族原理指向かの対抗軸が政党政治の中心となっており、前者が強い政党が左派、後者が強い政党が右派、それらの中間辺りの政党が中道、と分類されることが多い。なお、唯一自由経済指向が強い自由民主党については別途、リベラル派とされることもある⁽¹⁰⁾。

また、スロヴェニアの政党政治においては、上記市民原理指向対民族原理指向の他にも、自国の歴史評価をめぐり対抗関係が存在する。ここで各政党の分かれ目となるのは、旧ユーゴ時代の共産主義者同盟による統治を評価するか否か（＝旧共・容共か反共か）、および、第二次世界大戦時の占領軍に対するパルチザン抵抗運動の結果戦後旧ユーゴの中に成立したスロヴェニアを、今日の独立スロヴェニア国家の歴史的基盤として見なすか否かである。以下表1は、自由民主党が緑の党、民主党を吸収合併した1994年3月時点での、これらの問題に関する各党の立場を分類してみたものである。

(表1) スロヴェニアの歴史評価をめぐる各党の立場

	旧共・容共	反共
パルチザン・戦後スロヴェニア肯定	社会民主連合リスト、自由民主党、国民党	(人民党)
パルチザン・戦後スロヴェニア否定		キリスト教民主党

(出典) Veljko Rus, *Med antikomunizmom in postsocializmom* (Ljubljana: FDV, 1992), および, Rudi Rizman, "Radikalna desnica na Slovenskem," *Teorija in Praksa* 35:2 (1998), pp.249-270. を参考に筆者作成

キリスト教民主党の反共—パルチザン・戦後スロヴェニア否定は、こうした立場をとるカトリック教会の意向に沿ったものである。同党は、DEMOSによる政権交代後に早くも、

7 スロヴェニアにおいては、自国の経済レベルに対する自信から、進出外国資本は既存のインフラや設備を利用して、資本投下を行わないのではないかと、との見方が蔓延している。しかも、国家規模が小さいため、外国資本の自由な進出を認めれば、主要企業が軒並み買収され、自国経済の自立性喪失につながってしまうのではないかと、との懸念が国民の間に存在する。Michael Wyzan, "A Reluctant Star in the Economic Sphere," *Transition* 2:25 (1996), pp. 41-43.

8 Hermine Vidovic, "Slovenia - Relation with the European Union," *The Vienna Institute Monthly Report* 1996/7, p. 20; Stan Markotic, "An Unstable Government Faces an Election Year," *Transition* 2:12 (1996), pp. 54-56.

9 1996年11月の議会選挙後、第一党となった自由民主党は人民党と連立政権を発足させ、キリスト教民主党は野党に転じた。以後、人民党が民族主義的主張を弱める一方、キリスト教民主党は同主張を強めており、図の両党の位置は逆転しているといえる。Rizman, "Radikalna desnica na Slovenskem," p. 268.

10 例えば、次の文献の次の箇所。Adolf Bibič, "The Emergence of Pluralism in Slovenia," *Communist and Post-Communist Studies* 26:4 (1993), pp. 383-385; Lukšič, *Politični sistem*, pp. 27-28, 39-42.

この立場を明らかにしている⁽¹¹⁾。また、人民党は反共であるが、パルチザン・戦後スロヴェニアについては肯定の立場である。表で括弧付きとしたのは、同党がカトリック教会からの支持獲得を考慮して、肯定の明言を避けているためである⁽¹²⁾。表で注目されるのは、国民党の容共—パルチザン・戦後スロヴェニア肯定である。同党は、第二次大戦時に枢軸軍による占領に協力したカトリック教会を敵視しており、他方、パルチザン、戦後スロヴェニア、および、旧ユーゴ時代の共産主義者同盟による統治については、スロヴェニア人の民族的利益に適ったものとして評価している⁽¹³⁾。以上の諸立場に関し、スロヴェニアにおいては、反共—パルチザン・戦後スロヴェニア否定を右派、旧共・容共—パルチザン・戦後スロヴェニア肯定を左派、反共—パルチザン・戦後スロヴェニア肯定を中道とする議論も存在する⁽¹⁴⁾。

本稿では、以上の各対抗関係をふまえて、スロヴェニアの各政党を次のように分類することとしたい。まず左派は、パルチザン・戦後スロヴェニアを肯定し、市民原理指向が強い政党である。また中道は、パルチザン・戦後スロヴェニアを肯定し、市民原理指向と民族原理指向の中間近辺に位置する政党である。この両者の中には、旧共・容共政党と反共政党の双方が含まれる。これに対して右派とは、反共で民族原理指向が強い政党である。ここでは、対枢軸軍協力肯定、即ち、ファシズム肯定につながりかねないパルチザン・戦後スロヴェニア否定は、必要条件ではない。もし、右派政党が明確にこの立場をとっている場合は、極右である。なお、民族指向原理が強いが、パルチザン・戦後スロヴェニア肯定である国民党の（ような）ケースについては、「民族主義政党」、「反ファシスト政党」のように、具体的な表現を用いることにする⁽¹⁵⁾。

ところで筆者は、本稿の焦点である社会民主党を、表1には分類していない。というのも、同党は結党以来「ファシズムでもなく共産主義でもなく (Ne za fašizem in komunizem)⁽¹⁶⁾」を掲げて、自国の歴史に対する立場を明らかにしてこなかったからである。それでは社会民主党はこの問題をめぐって、1994年以降はいかなる立場をとっていったのであろうか。また同党はスロヴェニアの政党政治において、社会民主主義政党から反共・民族主義の右派政党へと、どのようにして変貌していったのであろうか。それらを次節で見たい。

2. スロヴェニアにおける政党政治の展開と社会民主党

(1) 社会民主主義政党としての社会民主党 (1989-93)

社会民主党は1989年2月、スロヴェニア社会民主同盟 Socialdemokratska zveza Slovenije (SDZS) として結成された。当初「党」ではなく「同盟」とされたのは、政治的

11 Veljko Rus, *Med antikomunizmom in postsocializmom* (Ljubljana: FDV, 1992), p. 93.

12 人民党のこの立場の明確化については後述。

13 国民党のこの立場については、同党綱領の第三項に記されている。“Slovenska nacionalna stranka na spletu,” <http://www.sns.si/stranka/program.asp> (国民党ホームページ、2004年11月26日アクセス)

14 例えば、次の文献。Tonči Kuzmanič, “Ekstremnost centra,” Breda Luthar et al., *Mit o zmagi levice: Mediji in politika med volitvami 2000 v Sloveniji* (Ljubljana: Mirovni Inštitut, 2001), pp. 26-53.

15 もちろん、こうした表現の使用は、政党がその主義を党の目的、基盤としている場合に限られる。

16 “Zgodovina SDS,” <http://www.sds.si/stranka/zgodovina.html> (社会民主党ホームページ、2004年4月13日アクセス)

な結社の自由が漸く認められた中で、共産主義者同盟を刺激しないためである⁽¹⁷⁾。結党の中心にあったのは、共和国首都リュブリャナにあるリトストロイ製鋼所の自主労働組合長トムシッチ France Tomšič、1960年代に政治犯として二度の被逮捕歴を持つ左派知識人プチュニク Jože Pučnik らであった。同党は結党に当たって、社会民主主義的価値の追求を強調し、自由、人権、スロヴェニアの主権を明記した共和国新憲法の制定、および、民主的な選挙の実施による政治的多元主義の実現を党の目標として掲げた⁽¹⁸⁾。

(表2) 1990年4月および1992年12月の議会選挙結果

政党名	党名変更	政党の新旧	1990年選挙議席	1992年選挙議席
社会民主同盟	社会民主党	新政党・DEMOS	17	4
キリスト教社会運動	キリスト教民主党	新政党・DEMOS	23	15
農民同盟	人民党	新政党・DEMOS	32	10
民主同盟	民主党(二党に分裂)	新政党・DEMOS	30	6
緑の党*		新政党・DEMOS	17	5
共産主義者同盟	民主改革党→ 社会民主連合リスト	旧体制与党	36	14
社会主義青年同盟	自由民主党	旧体制与党(傘下)	39	22
社会主義労働人民同盟	社会党	旧体制与党(傘下)	14	—
国民党		新政党	—	12
その他**			32	2
合計			240***	90

* DEMOS 結成後に遅れて合流 ** 少数民族枠の政党・議席を含む *** 三院合計

(出典) Drago Zajc, “Demokratske volitve in prehod nekaterih novih državah na območju nekdanje Jugoslavije,” Danica Fink-Hafner and Miro Haček, eds., *Demokratski Prehodi II* (Ljubljana: FDV, 2001), p.30.

1989年9月、スロヴェニア議会は、旧ユーゴからの分離権を含むスロヴェニアの主権、および、自由選挙による議会の選出を定めた共和国憲法修正案を可決した。すると同年末、社会民主同盟は、反体制、議会制民主主義の確立、スロヴェニアの自立ないし独立、で同一の立場をとる民主同盟、農民同盟、キリスト教社会運動の新政党三党とともに、来るべき選挙に備えてスロヴェニア民主野党連合 DEMOS を結成した。DEMOS 代表には、社会民主同盟代表のプチュニクが選出された。そして DEMOS は、1990年4月、従来の三院制議会⁽¹⁹⁾を対象に完全比例代表制で実施された自由選挙において、旧共産主義者同盟系の諸政党に対し勝利を取める(表2)。

DEMOS は、政権の座に就くと、スロヴェニアの旧ユーゴからの独立と、共和国新憲法の制定に取り組んだ。前者に関しては、1990年12月23日に独立の賛否を問う国民投票を実施し、賛成票88%(投票率93%)との結果に基づいて、翌1991年6月25日に独

17 他の新政党も同様に、当初「同盟」を名乗った。Bibič, “The Emergence of Pluralism in Slovenia,” p. 378.

18 “Ustanovni kongres Socialdemokratske stranke Slovenije,” http://www.sds.si/stranka/kongres_u.html (2004年4月13日アクセス)

19 三院とは、社会政治院、地域院、連合労働院である。これらのうち、社会政治院の決定が他院に優越した。Drago Zajc, *Procesi političnega odločanja u delegatski skupščini* (Ljubljana: FDV, 1993), p. 335.

立宣言を行った。その翌々日、スロヴェニア駐屯のユーゴ連邦軍とスロヴェニア共和国軍との間で国境管理権をめぐる衝突が発生したが、戦闘は数日で終息し、ユーゴ連邦軍がスロヴェニアから全面撤退して、スロヴェニアの独立はほぼ確実なものとなった⁽²⁰⁾。また、後者に関しては、独立戦争後に制定作業を本格化させ、新憲法は議会において1991年12月23日に採択された。政治制度の面では、議会 Državni zbor は議席数を90とし選挙制度については別途法律で定めること（第80条）、各地域および利益団体の代表による議席数40の国家審議院 Državni svet が設置されること（第96条）、などが定められた⁽²¹⁾。また、議院内閣制を基本とし、大統領の権限は限定的なものにとどまることも定められた⁽²²⁾。新憲法の準備過程では、特に民営化の方法をめぐる DEMOS 内各党の対立が顕わになった⁽²³⁾。そして DEMOS は、新憲法採択直後の12月30日に解散を宣言することになる⁽²⁴⁾。

それでは、この DEMOS 政権において、社会民主党（1990年4月に社会民主同盟から改称。改称後の略称は SDSS⁽²⁵⁾）はいかなる位置を占めていたであろうか。

社会民主党は、DEMOS 政権において、大きな影響力を持つことができなかった。それは、議会議員数の少なさ（連立第四党）の他、政策面で独自性に乏しく、かつ、主要ポストの確保に失敗したためであった。まず政策面であるが、農民同盟が農業・土地政策、キリスト教民主党が宗教・文化政策、というように、他の連立与党が分野により独自性のある主張を展開したのに対し、社会民主党にはそういった特定の分野がなかった。あえていえばそれは社会・労働政策であったが、同分野をめぐる同党の立場は、野党である旧共産主義者同盟系の諸政党とあまり変わらなかった。またポストの面では、社会民主党は人材の乏しさから、新政府において主要閣僚ポストを確保できなかった⁽²⁶⁾。社会民主党は、三院合同の議会においては副議長ポストを確保した。しかし、同ポストに議長のような権限はなく、社会民主党はここでも主導権を取れなかったのである⁽²⁷⁾。

社会民主党の連立政治における非力さは、次の中道左派政権においても続いた。旧 DEMOS 内中道・左派勢力⁽²⁸⁾の民主党、社会民主党、緑の党と、旧共産主義者同盟系の

20 Mirjam Kotar, "Slovenski pot v neodvisnost in demokracijo," Danica Fink-Hafner and Miro Haček, eds., *Demokratski Prehodi I* (Ljubljana: FDV, 2000), pp. 318-319. なお、EUによる正式の独立承認は1992年1月15日。

21 *Ustav Republike Slovenije*, VI. Državni Ustroj, Člen 80, 96.

22 Lukšič, *Politični Sistem*, pp. 11-12.

23 この対立は特に民主同盟内部、および、同党とキリスト教民主党の間に発生し、民主同盟は分裂するに至った。1992年に春以降各党間では漸進的な民営化方針でコンセンサスが形成されており、前掲図1はそれを踏まえたものである。

24 DEMOS 各党による連立政権は、議会においてペテルレ Lojze Peterle 首相に対する不信任案が可決された1992年4月まで存続している。Kotar, "Slovenski pot v neodvisnost in demokracijo," p. 321.

25 社会民主党が SDSS との略称を選んだのは、旧ユーゴでは、セルビア民主党（90年代前半にクロアチア、ボスニアにおいて紛争を主導）の略称が SDS (Srpska demokratska stranka) であり、同党と混同されなためであったと思われる。

26 新政府で中心となったのは、首相、文化相、教育相を出したキリスト教民主党と、内相、外相、法相、国防相を出した民主同盟であった。Bibič, "The Emergence of Pluralism in Slovenia," p. 379.

27 スロヴェニア議会議長の主な権限として、大統領臨時代行権、議会召集権など。 *Ustav Republike Slovenije*, Člen 85, 106. なお、大統領に関しては、プチュニク社会民主党党首が、1990年4月に議会選挙とともに行われた大統領選挙に DEMOS 代表として出馬したものの、クーチャン Milan Kučan 共産主義者同盟議長に敗れ落選した。Lukšič, *Politični Sistem*, p. 13.

28 ここでの中道・左派は、市民原理指向寄りという意味で用いている。当時は歴史評価の問題が、政党間の明らかな対抗軸とはなっておらず、DEMOS 内各政党の相違を示す意味でこの表現を用いた。

自由民主党、民主改革党、社会党（各旧党名は表2参照）が発足させた同政権において、社会民主党は旧共産主義者同盟系の諸政党との間に政策面での相違を打ち出せなかったのである。そしてそれは、社会民主党の有権者に対するアピールの弱さへとつながり、同党は1992年12月に小選挙区・比例代表併用制で行われた議会選挙において、最低得票率条項抵触ぎりぎりの惨敗を喫してしまう⁽²⁹⁾（表2）。

社会民主党は、1992年12月の選挙後も、自由民主党、社会民主連合リスト、キリスト教民主党が発足させた連立政権に加わった。同党は、党低迷の打開策として、路線的に近い社会党との合流を検討した。しかし、選挙で議会外政党となってしまった社会党との合流は魅力的な選択肢ではなく、また、合流に向けた協議も合意には至らなかった。

(2) 社会民主党の右派転向と党勢拡大（1994-96）

社会民主党は、当初の策と全く別の方法で低迷を脱することになった。それが冒頭でも述べた、右派政党への転向である。この転向の成功は、1993年5月に党首となったヤンシャに依るところが大きいので、ここでは、当時のスロヴェニア政治においてヤンシャがいかなる存在であったか、ということから議論を始めたい。

ヤンシャは、旧ユーゴ時代の1988年、スロヴェニア社会主義青年同盟発行の週刊誌ムラディナ *Mladina* に、ユーゴ連邦軍がスロヴェニアに軍事介入を計画している、との記事を書き、軍事機密漏洩の容疑でユーゴ連邦軍に逮捕された人物であった。逮捕事件以前に同同盟の議長候補であったヤンシャは、翌1989年に複数政党制が導入されると知識人政党である民主同盟に入党し、1990年4月の自由選挙後に発足したDEMOS政権においては、国防相に就任した。1991年6月、スロヴェニアの独立宣言後に発生したユーゴ連邦軍との戦闘では、スロヴェニア軍を勝利に導いて名声を高め、DEMOS政権後の中道左派政権においても国防相に留任した。なお、社会民主党には、民主同盟分裂後の1992年春、当時の党首プチュニクに招かれて入党した⁽³⁰⁾。

ヤンシャは、以上のような経歴から、スロヴェニアにおいては民族独立の英雄と見なされてきた。また、体制側の人間であったにもかかわらずユーゴ連邦軍に反旗を翻したことにより、旧体制のしがらみにとらわれない人物とのイメージも有していた。しかしその一方で、国防省内に個人支配を敷き、数多くの疑惑を引き起こしていた。そして、1994年3月末、覆面した国防省特殊部隊の一団が内務省秘密警察の一部員を襲撃する、という事件が発生する⁽³¹⁾。

この事件の直後、当時の首相ドゥルノウシェク Janez Drnovšek はヤンシャを、襲撃を

29 スロヴェニアの小選挙区・比例代表併用制は、全国が8ブロック、88小選挙区に分けられ、ブロック毎に比例名簿が提出され、投票は小選挙区毎に個人名で行われる、という方式で、比例代表的要素が強い。なお、最低投票率条項の規定は3.3%（2000年選挙より4%）。Lukšič, *Politični Sistem*, pp. 33-34.

30 “Predsednik SDS,” <http://www.sds.si/stranka/predsednik.html>（2004年4月13日アクセス）

31 疑惑の主なものに、1993年7月に表面化した、対ボスニア・ヘルツェゴヴィナ武器密輸疑惑など。“Jansa Was Not Innocent,” *AIM*, 11.7.1994. <http://www.aimpress.ch/dyn/trae/archive/data/199407/40711-005-trae-lju.htm>（2004年4月16日アクセス）また、襲撃された人物の名前から、スモルニカル事件 Afer Smolnikara と呼ばれることの多いこの事件に関しては、次の文献が詳しい。Marjan Malešič, “Executive Decisions and Divisions: Disputing Competences in Civil-Military Relations in Slovenia,” *Geneva Centre for the Democratic Control of Armed Forces, Conference Paper* (2003), pp. 1-21.

命令した疑いにより、国防相から解任した。これに対しヤンシャは、自らが無実の罪を問われていると主張し、また彼が率いる社会民主党は、連立政権から離脱した。すると、従来からのヤンシャ支持者に加え、体制変動後の境遇に不満を持つ有権者や、旧ユーゴ元大統領のドゥルノウシェクら旧体制首脳による統治の継続に反感を持つ有権者などが、首都リュブリャナにおいて、反政府・ヤンシャ支持を訴える大規模なデモを起こしたのである。これに応じてヤンシャは、「共産主義がスロヴェニア社会をコントロールし続けている」、「事件は政府を牛耳る共産主義者による（自分を標的とした）陰謀である」、「(1992年の)大統領・議会選挙は不正であり、早期の再選挙実施を要求する」などの発言を繰り返した⁽³²⁾。さらにヤンシャは、1994年春以降国境、土地所有権問題などをめぐってイタリア、クロアチアとの隣国間関係が悪化すると、政府の対応を弱腰であると批判するのみならず、スロヴェニアの国益が侵されつつあるとの主張を展開した⁽³³⁾。社会民主党には、こうしたヤンシャの主張に賛同する人々が、多数参集した。こうして、社会民主党の党勢は一挙に拡大することとなり、また、社会民主主義から現状打破主義、反共主義、民族主義へと、党のイデオロギー的立場を変えていく⁽³⁴⁾。

社会民主党は、右派転向後最初の選挙となった1994年12月の市町村議会選挙において14%強の票を獲得し、政権党の自由民主党、キリスト教民主党に次ぐ第三党に躍進した⁽³⁵⁾。しかし同党はこの結果に満足せず、政権奪取を目指して二つの戦略に着手した。その第一は、民族主義の更なる強調であり、1995年を通じ進められたEUとの連合協定締結交渉に対する否定的な態度である。同交渉では、スロヴェニアにおける、外国人による土地購入を禁止する法律が問題となり、政府は同法を撤廃する方針を打ち出した。すると社会民主党は、それが「イタリア人領土回復主義者によるスロヴェニアの土地の買い漁りを招き、ひいてはスロヴェニアの独立を危険に晒す」として、撤廃に強く反対したのである⁽³⁶⁾。また第二は、人民党および政権党のキリスト教民主党を巻き込んだ反共政党連合形成の動きであり、それを通じた連立政権の切り崩しである。社会民主党は、結局、この政権打倒工作には成功しなかった。しかし、イシューによっては、自由民主党と足並みの揃わないキリスト教民主党に接近し、同党を自由民主党から離反させる形で、しばしば政権

32 Moore and Markotich, "Slovenia: Progress, Problems," p. 66.

33 *Mladina*, 4.7.1995. p. 17. 1994年にイタリアとの間で問題になったのは、1975年に同国と旧ユーゴの間で締結された、第二次世界大戦後の国境画定など戦後処理を旨とする、オシモ条約 Treaty of Ossimo の更新である。1994年3月に発足したイタリアのベルルスコーニ政権は、戦後現スロヴェニア領を追われた約35万人のイタリア人の問題に関し、金銭的な補償ではなく土地所有権付与を要求、それが認められなければオシモ条約を更新せず、また、スロヴェニアのEU準加盟をブロックするとの態度に出た。詳しくは、Stan Markotic, "A Balancing Act between NATO and the EU," *Transition* 1:23 (1995), pp. 54-55. また、クロアチアとの関係は、スロヴェニアの領海がクロアチアの領海に囲まれて公海への出口を持たないことから、スロヴェニア側がクロアチア側に譲歩を要求して悪化した。詳しくは、*Die Presse*, 5.10.1995.

34 Rizman, "Radikalna desnica na Slovenskem," pp. 261-262.

35 Stan Markotic, "Stable Support for Extremism?," *Transition* 1:4 (1995), pp. 31-32.

36 *Balkan News and East European Report*, 11-17.6.1995. 社会民主党は、1995年5月に開催した第4回党大会において、「自由・真実・連帯 (Svoboda, Pravičnost, Solidarnost)」からなる従来のスローガンに、愛国心 (domoljubnost) の追加を決議した。"4. Kongres Socialdemokratske stranke Slovenije," http://www.sds.si/stranka/kongres_4.html (2004年4月13日アクセス) なお同党は、1996年6月に連合協定が締結されスロヴェニアがEUに準加盟して以降は、スロヴェニアの国益の重要性を強調しつつ、EU加盟に賛成する立場に変わっている。

を不安定化させたのである⁽³⁷⁾。

社会民主党は、1996年11月に行われた独立後第二回目の議会選挙において、16%余を得票し、16議席を獲得した(表3)。なお同党は、批判者やマスコミによって、略称および急進的な党員がナチス・ドイツの親衛隊SSになぞらえられる問題から、選挙前に略称をSDSSからSDSに変更した⁽³⁸⁾。また、社会民主党の右派路線は、西欧各国の社会民主主義政党から問題視された。そして、それらがつくる国際組織、社会主義インターナショナル Socialist Internationalは1996年末、1992年以来オブザーバー会員であった社会民主党を除名した⁽³⁹⁾。

(表3) 1996年11月の議会選挙結果

政党名	社会民主党	キリスト教民主党	人民党	社会民主連合リスト	自由民主党	国民党	年金者民主党	少数民族枠	合計
議席	16	10	19	9	25	4	5	2	90

(出典) Zajc, “Demokratične volitve,” p.30.

(3) 社会民主党極右政党化 (1997-)

1996年11月選挙の結果、議会では、社会民主党、キリスト教民主党、人民党からなる反共政党連合と、少数民族枠を含むその他の政党による旧共・容共政党連合が、45議席ずつで同数となった(表3)。両連合は、それぞれ自陣営による政府の樹立を目指したが、それらの試みは成功しなかった。1997年に入り、議会第一党の自由民主党と同第二党の人民党が連立交渉を開始した。そして同年2月、この両党および年金者民主党が、ドゥルノウシェク前首相・自由民主党党首を首班とする連立政権を発足させた⁽⁴⁰⁾。

社会民主党は、この政権の発足によって、議会における野党第一党となった。同党は、旧社会主義青年同盟の自由民主党が政権を維持したことに対し、従来からの旧体制批判を継続した。また、自由民主党と連立した人民党に対しては、反共という党の立場よりも権力や利益を優先したとして非難した。社会民主党は、この政権の下においても、政権奪取を目指して新たな戦略に着手した。その第一は、完全小選挙区制導入を旨とする選挙制度改革の要求であり、また第二は、カトリック教会との関係強化である。

社会民主党が完全小選挙区制導入を訴え出したのは、議会における反共政党連合とそれ以外の政党という構図の固定化を目指してである。従来の小選挙区・比例代表併用制では小党が分立し、選挙後に立場の異なる数党が連立して政権を発足させなければならないか

37 その一例が、1996年5月の議会におけるターレル Zoran Thaler 外相(当時)に対する不信任決議案可決である。Markotic, “An Unstable Government Faces an Election Year,” pp. 55-56.

38 Rizman, “Radikalna desnica na Slovenskem,” p. 260.

39 Jernej Pikalo, “Vrnitev (ali samo vztrajanje) levice na Slovenskem,” Fink-Hafner and Haček, eds., *Demokratični Prehodi I*, p. 208.

40 Zajc, “Parliament of Slovenia,” pp. 107-108. なお、同文献では、反共政党連合を右派政党ブロック、旧共・容共政党連合を左派政党ブロックと位置づけているが、後者の政党ブロックが左派であるとは必ずしもいえないため、ここでは反共-旧共・容共の対抗軸で分類した。ちなみに、年金者民主党は、元々社会民主連合リストの一構成体であったが、1996年11月選挙を前に同リストから分離し、別個に議会に参画した政党である。Lukšič, *Politični sistem*, p. 42.

らである⁽⁴¹⁾。1996年11月選挙の前からこの主張を始めていた社会民主党は、4万人を超える支持者の署名を集めて、選挙制度改革に関するレファレンダムの実施を政府と議会に要求した⁽⁴²⁾。その結果、選挙翌月の12月にレファレンダムが実施された。同レファレンダムでは、投票率、完全小選挙区制導入への賛成票とも過半数に達せず、結局、選挙制度改革には至らなかった。しかし社会民主党は、2000年7月の選挙法修正において選挙制度が小選挙区・比例代表併用制であると明記されるまで、この完全小選挙区制導入にこだわり続けた⁽⁴³⁾。

また、社会民主党はカトリック教会と、1997年春にアルゼンチンからの帰還政治移民ロデ Franc Rode が大司教に就任して以降接近した。スロヴェニアのカトリック教会は、第二次世界大戦中にナチス・ドイツとイタリアによる占領に協力した過去を持ち、スロヴェニアが独立して以降は、かつての対枢軸軍協力を正しかったとする立場をとってきた⁽⁴⁴⁾。社会民主党は、組織票を有するカトリック教会の支援を受けるに当たって、同教会のこうした立場を受け容れたのである。また、カトリック教会のその他の主張、例えば、妊娠中絶の非合法化や公立学校における宗教教育の導入なども、党の政策に取り込んだのである⁽⁴⁵⁾。もっとも、新大司教のロデには、スロヴェニア人はカトリック教徒でなければならぬとの立場から、自民族の一部を占める新教徒を「ドイツ宗教 (nemška vera)」一派呼ばわりするなど不寛容で攻撃的な発言が多く、一部の熱心な信者以外の間では教会離れが進んだ⁽⁴⁶⁾。そういったこともあり、社会民主党は、カトリック教会との関係強化、およびその産物としての極右路線によって、全体としては支持者を減らしてしまった⁽⁴⁷⁾。

2000年に入り、連立政権の一翼を担ってきた人民党が、キリスト教民主党との合同を決定して自由民主党との連立を打ち切り、ドゥルノウシェク政権は崩壊した。すると社会民主党は、この合同政党⁽⁴⁸⁾、および、国民党、年金者民主党からの離党議員と協力して、右派政権を樹立することに成功した。首相には、ロデと同じくアルゼンチンからの帰還政治移民であるバユック Andrej Bajuk が就任した。バユックは、議会演説の冒頭で「スロヴェニア国籍所有者の皆さん (Spoštovane državljanke in državljani Slovenije)」と挨拶

41 “Resolucija o volilnem sistemu,” <http://www.sds.si/program/resolucije02.html> (2004年4月16日アクセス)

42 憲法第90条においては、個別法の制定および変更に関するレファレンダム実施の条件として、国家審議院の要請、議会議員30名以上の要請、ないし有権者4万人以上の署名が必要である旨規定されている。*Ustav Republike Slovenije*, VI. Državni Ustroj, Člen 90.

43 レファレンダムの投票率は37.9%で、うち44.52%が完全小選挙区制導入への賛成票であった。Lukšič, *Politični Sistem*, p. 31.

44 Rizman, “Radikalna desnica na Slovenskem,” p. 264.

45 <http://www.sds.si/stranka/forum.html> (2004年11月26日アクセス)

46 Igor Mekina, “Prekrajanje istorije,” *AIM*, 1.7.2000. <http://www.aimpress.ch/dyn/pubs/archive/data/200007/00701-004-pubs-lju.htm> (2004年11月25日アクセス) なおこの文献には、「スロヴェニア(政治)においては、共産主義勢力が遂行する内戦が未だに進行している」とか、「人民解放戦線(=パルチザン)とは単なる欺瞞であり、スロヴェニア国家の基盤にはなり得ない」といった、ロデの極端で攻撃的な発言の例がいくつか紹介されている。

47 Miha Štamcar and Gregor Cerar, “Novi obraz Janez Janše,” *Mladina* 9.7.2001. <http://www.mladina.si/tehdnik/200127/clanek/preobrazba/> (2004年11月26日アクセス)

48 合同政党名はそのまま、人民党+キリスト教民主党 (SLS+SKD) となった。Drago Zajc, “Demokratske volitve in prehod nekaterih novih državah na območju nekdanje Jugoslavije,” Danica Fink-Hafner and Miro Haček, eds., *Demokratski Prehodi II* (Ljubljana: FDV, 2001), p. 31.

搦したり⁴⁹⁾、パルチザン・戦後スロヴェニアを否定するような発言や行動を繰り返したりして⁵⁰⁾、スロヴェニア国民の間に物議を醸した。また彼の政権は、発足後早速各省庁および各公社の幹部人事に手をつけて、それらのほぼ全てを連立与党の党員ないしシンプにすげ替えた⁵¹⁾。バユック政権では、2000年秋に予定される議会選挙をめぐって、完全小選挙区制の導入を主張する社会民主党および合同政党内旧キリスト教民主党派と、小選挙区・比例代表併用制の維持を主張する合同政党内旧人民党派が対立し、同政権も、また合同政党も、数ヶ月ともたなかった⁵²⁾。そして、同年10月に議会選挙が従来通りの選挙制度で行われ、社会民主党は第二党となったものの前回選挙より議席を減らし、また、合同政党から分かれた二党は惨敗を喫する(表4)。

(表4) 2000年10月の議会選挙結果

政党名	社会民主党	新スロヴェニア党*	人民党	社会民主連合リスト	自由民主党	国民党	年金者民主党	青年党	少数民族枠	合計
議席	14	8	9	11	34	4	4	4	2	90

*キリスト教民主党政後継政党

(出典) Zajc, “Demokratske volitve,” p. 30.

2000年11月、議会選挙で勝利を取めた自由民主党が、社会民主連合リスト、人民党、および年金者民主党と組んで、ドゥルノウシェクを再び首班とする連立政権を発足させた。同政権では、ドゥルノウシェクの大統領転出に伴い、2002年12月にロップ Anton Rop 前蔵相が首相職を引き継いだ。それ以降も連立与党の構成は変わらなかった⁵³⁾。なお人民党は、過去四年の政権担当の間に民族主義指向を弱めるとともに、キリスト教民主党派との合同と分裂、および社会民主党との連立を経験する中で、パルチザン・戦後スロヴェニア肯定の立場を明確にした⁵⁴⁾。それゆえ、現在の同党は中道ないし中道右派政党であるといえ、同党が参加した連立政権は、中道左派政権と呼ぶものである。

一方、社会民主党は議会において、先のパユックを党首とするキリスト教民主党政の後継政党、新スロヴェニア党と野党連合を組織した。社会民主党は、1996年の社会主義国際ナショナル除名後、1999年に欧州諸国の保守政党、キリスト教民主主義政党による国際組織である、欧州人民・欧州民主党グループ EPP-ED に加盟を申請し、2001年9月にオ

49 Državni zbor RS — Sejni Zapisek. 26.04.2000. http://www2.gov.si/zak/arhiv/sej_zap2.nsf/0/61c431b3da6c1192c12568d50042e845?OpenDocument (スロヴェニア共和国議会ホームページ上の議事録。2004年11月29日アクセス) パユックのこの按搦の仕方は、スロヴェニア人以外に、スロヴェニア国籍を有する旧ユーゴ系移民の存在を強調したのではないかと、論議を呼んだ。

50 Mekina, “Prekranjanje istorije.” なおこうした発言や行動が続いたことから、2000年9月、当時の大統領クーチャンはパユックに対し、第二次世界大戦中・戦後をめぐる個人的な歴史観を問うとともに、それをスロヴェニアの公式的な立場として表明しないよう警告する公開書簡を送付した。Dnevnik, 23.9.2000.

51 Večer, 16.6.2000.

52 2000年7月、自由民主党および社会民主連合リストが、選挙制度を小選挙区・比例代表併用制であると明記し、かつ、比例代表の最低投票率に関する規定を3.3%から4%に引き上げるとする選挙法修正案を議会に提出した。すると、同法案に合同政党内旧人民党派が賛成、旧キリスト教民主党派が社会民主党とともに反対し、この直後に合同政党は分裂した。なお同法案は可決され、また、パユック政権は同年11月まで暫定政権として継続している。Delo, 27.7.2000. および、Lukšič, *Politični sistem*, pp. 33-34.

53 <http://www.sigov.si/vrs/slo/vlada/dosedanje-vlade.html> (2004年5月8日アクセス)

54 France Vreg, “Volitve 2000 in predvolilna kampanja,” *Teorija in Praksa* 38:2 (2001), pp. 192-193.

ブザーバー加盟を承認された⁽⁵⁵⁾。同党は、この政権の下においても、旧体制批判や、選挙制度改革要求の際に見せたレファレンダム戦略などを展開した⁽⁵⁶⁾。しかし同時に、1990年代後半の極右路線が支持者離れを招いた反省から、また、無党派層への食い込みを狙って、パルチザン・戦後スロヴェニア否定のトーンを弱めていった⁽⁵⁷⁾。

3. 社会民主党右派政党化の諸理由

共産主義体制崩壊後の中・東欧諸国においては、「ナショナル・ポピュリズム」と呼ばれる政治潮流が出現している。それは、国民共同体の純粋性を追求するナショナリズムと結合したポピュリズムであり、階級横断的動員、否定的情熱（不安、憎悪）、ルサンチマンの体系的利用、階級協調主義、権威主義体制の追求、護民官的役割、人民投票的民主主義の称賛、デカダンスの告発、国民的アイデンティティの防衛への強調、強い国家と小さな政府の結合、陰謀論的敵の明確化、国民優先の原則と排除の人種主義の主張を主要な内容とする運動である⁽⁵⁸⁾。前節で見てきたように、社会民主党にとってのナショナリズム／民族主義は、目的というよりも手段である。他方、旧共産主義者同盟系の政党に対する陰謀論的敵視、隣国との国境・土地所有権問題を利した国民的アイデンティティの防衛への強調など、これらの要素のいくつかは、同党の中心的な構成要素でもある⁽⁵⁹⁾。筆者は社会民主党のこうした性格を鑑みて、冒頭にて同党の右派政党化をポピュリズムと表現した。それではいかなる理由から、社会民主党はこの右派路線をとり始めたのであろうか。

(1) 党首ヤンシャのリーダーシップ

社会民主党の右派路線選択は、党首ヤンシャの個人的志向が色濃く反映されたものである。また、前党首のプチュニクが、ヤンシャが同党をそうした方向に先導するのを、積極的に認めたことも大きい⁽⁶⁰⁾。というのも、1992年12月の議会選挙で惨敗した同党においては、この両者が多大な影響力を有していたからである。なお、右派政党化後の同党では、1994年以前からの党員は影をひそめ、ヤンシャの主張に共鳴して新たに入党した人々が、党の主力となっている⁽⁶¹⁾。

55 Večer, 29.6.2001.

56 その一例として、2001年6月の独身女性の不妊治療権をめぐるレファレンダムがある。同レファレンダムは、治療に反対し婚姻・家族の重要性を主張するカトリック教会が、社会民主党と協力して実施させたものである。Ali H. Žerdin, “Referendum o izbiri,” *Mladina*, 7.5.2001. <http://www.mladina.si/tehdnik/200118/clanek/referendum/> (2004年6月22日アクセス)

57 Lukšič, *Politični Sistem*, p. 40.

58 畑山敏夫『フランス極右の新展開: ナショナル・ポピュリズムと新右翼』国際書院、1997年、132-133頁。

59 具体的には、内敵（＝旧体制）や外敵（＝隣国）に対する否定的情熱および護民官的役割の強調、人民投票的民主主義の称賛に該当するレファレンダム戦略、ヤンシャによる権威主義体制の追求、旧ユーゴ系移民をめぐる国民優先の原則と排除の人種主義、および、強い国家と小さな政府の結合である。これらのうち、権威主義体制の追求と、国民優先の原則と排除の人種主義が以下の議論に出てくる他、強い国家と小さな政府の結合は、党の綱領に記されている。“Program SDS,” <http://www.sds.si/program/resolucije05.html>

60 *Mladina*, 30.5.1995, p. 5.

61 前掲した社会民主党(新)イデオログのスヴェル、現副党首のブレイツ Miha Brejč, プルチャン Andrej Bručanらは皆1994年の入党であり、同年を境とした人材面での非連続性は、社会民主党ホームページ中の次のページを見れば明らかである。<http://www.sds.si/stranka/kdojekdo.html> (2004年4月13日アクセス)

ヤンシャ個人に関していうならば、必ずしも自ら積極的に行動を起こすタイプではない。むしろ、諸状況を眺めて判断した上で、動き始めるタイプである⁽⁶²⁾。このヤンシャの経歴は、熱心な共産主義者から反共主義者、軍の文民統制や良心的兵役拒否を訴える平和主義者から軍内に個人支配を敷く国防相、というように両極端であり⁽⁶³⁾、政治家としては有権者から嫌悪されるか熱心な支持を受けるかのいずれかである⁽⁶⁴⁾。1994年の反政府デモにおいては、ヤンシャ支持者たちが「ヤンシャー民主主義—ヨーロッパ (Janša-Demokracija-Evropa)」、「クーチャン—共産主義—バルカン (Kučan-Komunizem-Balkan)」⁽⁶⁵⁾、「スロヴェニア文化のアメリカ化に反対 (proti amerikanizaciji slovenske kulture)」⁽⁶⁶⁾などのプラカードを掲げて、日頃の政治的社会的不満を表明した。ヤンシャは、こうした支持者たちの不満に対し何が必要であるのかを見極めつつ、反共主義、民族主義を打ち出して、社会民主党の舵を右に切ったものと思われる。

ちなみに、国際環境、即ち、他国における右派政党（化）の例が社会民主党に影響を与えた可能性としては、隣国オーストリアのハイダー率いる自由党、および、ロシアのジリノフスキー率いる自由民主党の事例が参考とされている可能性がある⁽⁶⁷⁾。特に、自由民主党の躍進から、「ジリノフスキー現象」の語を生んだロシア議会選挙は、社会民主党が右派に転じる数ヶ月前の、1993年12月に行われている⁽⁶⁸⁾。しかし仮に両例が参考にされていたとしても、それを行った主体は、社会民主党ではなくヤンシャ個人であろう。

(2) 反共・民族主義政党の不在

また、ヤンシャは、反共主義と民族主義を同時に強調する政党がないという政治的立場の空白を利用して、社会民主党を右派路線に導いたともいえる。1990年4月の議会選挙から、同党の右派政党化に至るまで、この二つの立場を同時に強調する政党は実は存在しなかったのである。

第二次世界大戦後初の自由選挙となった1990年4月の議会選挙は、スロヴェニアの独立運動が活発化し、民族主義的な風潮が強まる中で行われた。しかし、同選挙を前に出現

62 前大統領クーチャンは最近のインタビューでヤンシャについて、「経験豊富、分析上手、戦術家、野心家」と評している。*Sobotna priloga Dela*, 23.10.2004.

63 Rizman, “Radikalna desnica na Slovenskem,” p. 259.

64 例えば、1999年8月の世論調査では、ヤンシャに関し、肯定評価が33.2%、否定評価が34.8%と割れ、「どちらともいえない」は24.3%、「答えられない」は7.6%であった。*Delo*, 2.8.1999. なお、筆者は、社会民主党リウトメル Ljutomer 支部長のゴシュニャク Maksimiljan Gošnjak 氏より、ヤンシャの両極端な経歴に関し、共産主義体制の中ではそのように行動していかざるえなかったとの説明を受けたことがある。そうした見方が、ヤンシャ支持者の間では浸透しているのかもしれない。ゴシュニャクとのインタビュー（1999年8月10日、リウトメル）

65 Zver, *100 let socialdemokracija*, p. 217.

66 Rizman, “Radikalna desnica na Slovenskem,” p. 261. このスローガンは、スロヴェニア文化、スロヴェニア人民族意識を守れとの立場からである。

67 オーストリアの自由党は、1986年まで、経済政策に関し国家主義指向であったが、同年にハイダーが党首に就任すると自由主義指向に一転し、続いて、移民・難民の排斥を訴える、民族原理指向の強い政党へと転向した。社会民主党の右派政党化は、こうした同党の転向に近似しているといえる。詳しくは、フォルクマール・ラウバー編、須藤博忠訳『現代オーストリアの政治』信山社、1996年、105頁。

68 森下「一九九三年ロシア議会選挙の経過と結果」159-162頁。

した民族主義政党はいずれも、有権者の間に支持を拡大することができなかった⁽⁶⁹⁾。また、独立後初の選挙となった1992年12月の議会選挙は、近隣するボスニア・ヘルツェゴヴィナにおける紛争によって、大量の難民が流入する中で行われた⁽⁷⁰⁾。同選挙では、イエリンチッチ Zmago Jelinčič 率いる国民党が外国人排斥を訴えて有権者の注目を集め、大きく集票した（前掲表2参照）。しかし同党は選挙後、第二次大戦中の対枢軸軍協力をめぐる歴史評価の対立から、間もなく分裂してしまっただけである。そして、イエリンチッチら反枢軸軍派が残留した国民党は、民族主義であるが、パルチザン・戦後スロヴェニアも旧ユーゴ時代の共産主義者同盟による統治も肯定するという、容共の民族主義政党と化したのである⁽⁷¹⁾。

社会民主党は、以上のごとく、反共主義と民族主義とを同時に強調する政党が不在であった中、それらの主義に賛同する有権者の支持獲得を目指して右派政党に転向を図った。それでは、同党のこの右派政党化は、いかなる背景から成功し定着していったのであろうか。それを次節で見よう。

4. 社会民主党右派政党化の諸背景

社会民主党右派政党化の成功と定着に関わる背景としては、(1) 各行政機関、公社における政党支配の形成、(2) コーポラティズム制度の問題、(3) 歴史評価をめぐる国民の二極分化、(4) 国家、社会の小ささ、の四者が考えられる。これらのうち、前二者はスロヴェニアの独立後に整備された制度における問題であり、また、後二者は地理・歴史的不いわば所与の条件である。

(1) 各行政機関、公社における政党支配の形成

スロヴェニアでは、旧ユーゴからの独立が実現すると、独立国家としての法体系および諸機関を早急に整備する必要が生じた。1992年5月にDEMOS政権を引き継いだ、旧DEMOS内中道・左派政党と旧共産主義者同盟系の諸政党による連立政権は、独立後最初の議会選挙までの暫定政権であることを自認して、法体系の整備・制定に取り組んだ⁽⁷²⁾。そして1992年12月の議会選挙を受け発足した、自由民主党、社会民主連合リスト、キリスト教民主党、社会民主党による連立政権は、前政権が制定した諸法に基づいて、各行政機関、公社の整備を推進した。そこで行われたのが、政党を通じた人材のリクルートである。

69 同選挙で民族主義政党が振るわなかったのは、有力な政党が不在だったためであり、民族主義に賛同する有権者が少なかったためではない。実際、同時に実施された大統領選挙では、民族主義を唱える独立系候補クランベルゲル Ivan Kramberger に、18.5%もの票が流れた。Rizman, “Radikalna desnica na Slovenskem,” p. 255.

70 1992年、スロヴェニアに流入したボスニア難民の総数は約4万5千人。Matjaž Klemenčič, “Prostovoljne in prisilne migracije kot orodje spreminjanja etnične strukture na območju držav nasledic nekdanje Jugoslavije,” *Rasprave in Gravidno* 36/37 (2000), p. 169.

71 Lukšič, *Politični sistem*, p. 40.

72 Bibič, “The Emergence of Pluralism in Slovenia,” pp. 380-381.

リクルートは、いわば連立与党間でのパイの分け合いとなった。そこでは、連立与党の党員が各省庁に散らばったとはいえ、どの政党が、どの省庁に大臣を輩出しているかが大きく影響した。例えば、ペテルレ・キリスト教民主党首が大臣に就任した外務省には、同党党員が多数入省した。同様に、自由民主党が大臣ポストを得た大蔵省、開発省には同党党員が、また、社会民主連合リストが大臣ポストを得た経済省⁽⁷³⁾、厚生労働省には同党党員が、多数リクルートされた。そしてこれらの政党は、それぞれ党員を多く送りこんだ省庁に対する影響力を確保した。なお、これら三党に比べ議会議席が少ない社会民主党は、経済関係の省庁、公社に対しては党員を送りこむことができなかった。しかしながら同党も、党首ヤンチャが大臣を務める国防省において党員を多数入省させ、同省への影響力を確保したのである⁽⁷⁴⁾。

社会民主党は、1994年に連立政権を離脱すると、旧体制勢力による支配継続の例として、この連立与党による人事および行政機関の分け合いを取り上げ非難した。すると、体制転換において政党を通じた利益分配に浴していない人々が、社会民主党によるこの非難に共鳴し、彼らの一部は同党に加わった⁽⁷⁵⁾。連立与党による人事および行政機関の分け合いは、1993年にほぼ集中して行われており、当時、旧共産主義同盟系の二党が与党でなかったならば、両党の党員および影響力が行政に浸透することはなかったかもしれない⁽⁷⁶⁾。しかし、両党およびキリスト教民主党が分け合いを露骨に進め、しかも、社会民主党は主要な分け合いから排除されたことで、社会民主党が連立離脱後に開始した旧体制批判は説得力を持ち、同党の右派政党化の成功につながったのである。

(2) コーポラティズム制度の問題

独立後のスロヴェニアにおいては、コーポラティズム制度⁽⁷⁷⁾、即ち、異なる利益・利害を持つ集団間の協議を、政治的な意思決定構造の一部とする制度が導入された。この制度において、旧体制的な要素の残存や再生が見られるために、社会民主党による旧体制批判は通用している面がある。

スロヴェニアで導入されたコーポラティズム制度は、次の機関および仕組みから成る。第一は、本稿の前半部分において触れた、国家審議院である。国家審議院は、立法府にお

73 民営化、および私企業設立への対応を担当する官庁。

74 グリゾルド Anton Grizold 前国防相によれば、約 4500 人いる国防省員のうち、社会民主党の党員が約 1200 人を占めるとのことである。グリゾルド前国防相とのインタビュー(2001年2月19日、リュブリャナ)。

75 1994年の連立離脱後、社会民主党に新たに加わった党員は一万人規模に上り、そのうちの20%前後を高学歴層が占めていることが特徴的である。Zver, *100 let socialdemokracija*, pp. 145-149. ただし、党首ヤンチャの議論、および、グリムス Branko Grims 議会議員ら筆者が知る同党党員から得ている印象として、同党およびその関係者は、個人の非受益や不遇を、とにかく(旧体制的要素がはびこる)制度の責任とする傾向にあり、それはそれで問題である。

76 1993年にリクルートされたキリスト教民主党員は、1996年以降同党が野党であるにもかかわらず各行政機関、公社に勤務し続けており、同年のリクルートがいかに重要であったかの証左になると思われる。ちなみに、1993年当時野党であり、1996年以降与党となった人民党は、政治任命の幹部ポスト以外に、同党党員を各行政機関、公社には送りこめていない。

77 スロヴェニアのコーポラティズムは国家主導であるが、国家コーポラティズムの語が含意するような強圧的な形態でもない。ここではコーポラティズム制度との表現を用いた。国家コーポラティズム他、コーポラティズムの諸類型に関しては、次の文献を参照。P.C. シュミッター、G. レームブルッフ編、山口定監訳『現代コーポラティズム(I)』木鐸社、1984年。

いて議会の諮問機関の性格を有し、その構成は表5のとおりである。同院の議員は、各地域、利益団体毎に、有権者ないし会員が選んだ選挙人団の投票によって選出される⁽⁷⁸⁾。第二は、会議所 (chamber) 制度である。会議所は、公的団体として職能別に設立されているが、会員加入は必ずしも義務ではない⁽⁷⁹⁾。第三は、経済、社会、賃金政策に関する、政府、経営者組織、労働者組織の三者による合意形成である。この三者は1994年以来、合意形成機関として経済社会委員会を設置し、運営している⁽⁸⁰⁾。

(表5) 国家審議院の構成

利益団体	経営者	労働者	農業	商業	自営業者	大学教育	初中等教育	学術研究	社会保障	医療	文化・スポーツ	地域代表	計
議席	4	4	2	1	1	1	1	1	1	1	1	22	40

(出典) Igor Lukšič, *Politični sistem Republike Slovenije* (Ljubljana: Znanstveno in publicistično središče, 2001), p. 21.

それでは、このスロヴェニアのコーポラティズム制度は機能しているであろうか。また、この制度のどこに、旧体制的な要素の残存や再生が見られるのであろうか。

まずは第一の国家審議院である。同院は、各地域・利益団体の代表により構成される点といい、間接選挙に基づいて議員が選出される点といい、旧体制の議会における地域院、連合労働院に近似した機関である。同院は、諸政策をめぐって、関連利益団体の代表が提言を行ったり、影響をおよぼしたり、あるいは合意を形成したりする機関ではなく、コーポラティズム機関としての実質的な機能は備えていない⁽⁸¹⁾。

また第三の政府、経営者組織、労働組合による合意形成に関し、それを行っている三者のうちの後二者は、旧体制以来の組織である。しかも、この両組織の幹部会は、旧共産主義者同盟の社会民主連合リストとの間で密接な関係を築いている⁽⁸²⁾。なお労働組合に関しては、DEMOS 政権時に、三つの労組が新たに結成されている (表6)。しかしそれらは、合意形成に必ずしも関与しておらず、そうした合意に労働者層の利益が反映されるのかは、甚だ疑問である。

以上のごときスロヴェニアのコーポラティズム制度に対し、社会民主党は意外にも、制度自体には反対していない。同党は、制度を動かす主体が一新されなければならないこと

78 Lukšič, *Politični sistem*, pp. 20-21. 国家審議院はスロヴェニア憲法上、議会とともに立法機関に位置づけられるが、二院制議会の上院よりもさらに権限は小さい。スロヴェニアのこの議会制が一院制か二院制かに関しては、二院制であるといえよう。

79 Drago Zajc and Igor Lukšič, "The Development of Modern Parliamentarism: The Case of Slovenia," Adolf Bibič and Gigi Graziano, eds., *Civil Society, Political Society, Democracy* (Ljubljana: Slovenian Political Science Association, 1994), p. 381.

80 Igor Lukšič, "Social Partnership in Slovenia: How to Go Further?," Kropivnik, Zajc, Lukšič, eds., *Conflict and Consensus*, pp. 195-196.

81 Ivan Kristan, "Specifics of Slovene Bicameralism," Kropivnik, Zajc, Lukšič, eds., *Conflict and Consensus*, pp. 303-305.

82 合意形成を行っている経営者組織は経済会議所、また労働組合は旧自主管理労働者組織の自由労働組合である。1994年、経済社会委員会の設置に合意したこの両者および政府の代表は(経済会議所会頭、自由労組委員長、厚生労働相)、いずれも社会民主連合リストの幹部会員であった。Lukšič, "Social Partnership in Slovenia," pp. 201-202.

を主張しているのである⁽⁸³⁾。この主張によって社会民主党は、旧体制に否定的な層、および、既存のコーポラティズム制度において受益の少ない層からの支持を集めているのである。この制度が導入された当初、旧共産主義者同盟の社会民主連合リストが制度内で強い影響力を持つことは想定されていなかったであろう。しかし、現実になんてなってしまう以上、社会民主党による旧体制批判は、あながち的外れともいえないのである。

(表6) スロヴェニアにおける労働組合とその規模 (1997年)

労組名	自由労組(旧自主管理労組)	独立労組(新設)	労組ペルガム(新設)	連合'90(新設)
組合員数	436,000	169,000	87,500	40,000

(出典) Lukšič, *Politični sistem*, p. 46.

(3) 歴史評価をめぐる国民の二極分化

歴史評価がスロヴェニアの政治における一焦点であることはこれまでも何度か言及してきている。それではなぜ、今日のスロヴェニアでは、この歴史の問題がそれ程の影響力を有しているのだろうか。また、そもそもスロヴェニアは第二次世界大戦において、どのような状況にあったのだろうか。

スロヴェニアは第二次大戦下、ナチス・ドイツとイタリアにより折半され占領された。枢軸占領軍は隣接するクロアチアと異なり傀儡国家の樹立を認めなかったが、傀儡政権を設置し民族的要望に一部応えることで、スロヴェニア人への浸透を図った。こうした枢軸軍を支持する側に回ったのが、戦前政府の一部要人、カトリック教会、およびそのシンパである。彼らにすれば、カトリック国家から来た枢軸軍の方が、反宗教的なユーゴ共産党率いるパルチザンよりも、スロヴェニア民族にとり有益な存在だったのである⁽⁸⁴⁾。

一方、ユーゴ共産党率いるパルチザンは、戦前にスロヴェニア人の主要な政党であった人民党が待機主義の方針をとる中で、枢軸軍およびその協力勢力に対し抵抗運動を展開した唯一の組織であった。パルチザンには、ドイツ本国の強制収容所送りとなる危険にもかかわらず、枢軸軍の統治に反発する多くの人々が参加した。パルチザンは、第一次大戦後にイタリア領となった地域を含む、スロヴェニア人が多数派を占める全域において、抵抗運動の組織に成功した。そして、ほぼ独力でスロヴェニアおよび旧ユーゴの全土を開放することに成功した⁽⁸⁵⁾。

スロヴェニアでは今日、このどちらに歴史的な正統性を見るかで、世論が極端に割れている。パルチザン抵抗運動を正統視する者からすれば、対枢軸軍協力とは領土分断への負担であり、反スロヴェニア的行為である。そして、パルチザン抵抗運動は戦後スロヴェニアに統一をもたらし、しかも、今日に至る経済的発展の基礎となった存在である⁽⁸⁶⁾。一方、対枢軸軍協力を正統と見る者にとっては、協力の動機は(純粋な)愛国心であり、パルチ

83 “Resolucija o delavski zbornici,” 9.9.1999. <http://www.sds.si/program/resolucije02.html> (2004年7月25日アクセス) 社会民主党がコーポラティズム制度そのものに反対でないのは、同党が政権を担当する際、この制度が自党に有利に作用するとの考えからであると思われる。

84 Jože Pirjevec, *Jugoslavija 1918-1992* (Koper: Založba Lipa, 1995), pp. 126-127.

85 Pirjevec, *Jugoslavija 1918-1992*, pp. 123-124, 150-151.

86 Doroteja Lešnik and Gregor Tomc, *Rdeče in Črno* (Ljubljana: Znanstveno in publicistično središče, 1995), pp. 187-205.

ザン抵抗運動は戦後の共産主義化の元凶である。パルチザンのイデオロギー的な間違いは、共産主義体制の崩壊によって証明されており、その勝利がなかったならば、今日のスロヴェニアはより発展していたかもしれないのである。この立場をとる者には、自身または家族の対枢軸軍協力参加から、戦後共産主義体制下で社会的差別を被った者が多い。それゆえ、彼らにとり第二次大戦をめぐる歴史評価は、自己の存在に関わる問題なのである⁽⁸⁷⁾。

社会民主党が右派政党に転向後、カトリック教会の支援を受けるに当たって、第二次大戦中の対枢軸軍協力を評価する立場となったことは先にも述べたとおりである。それにより同党は、スロヴェニア人口の一定数を占める、かつての対占領軍協力者とその家族の支持を獲得した反面、パルチザンを正統視する一部の支持者を失った。なお、社会民主党が右派政党化後に構築した政治移民勢力との関係には見過ごせないものがある。同党が直接、間接に関わった、帰還政治移民の政府およびカトリック教会の長への就任は、1990年代に民族主義政権が支配し、紛争が行われたセルビア、ボスニア、クロアチアにおいてさえ、起こっていない事態だからである⁽⁸⁸⁾。

(4) 国家、社会の小ささ

社会民主党の右派政党化の成功を考える上で、もう一つ忘れてはならない要因であると思われるのが、スロヴェニアの国家規模である。面積約二万平方キロ、人口約200万人、と日本でいえば県規模の国家であるスロヴェニアにおいては、小国家ならではの、特徴的な政治環境、政治意識が存在する。

まず第一は、行政機関や社会・経済の諸組織の小ささ、および、諸問題の身近さであり、それらが人々の目に端的、具体的に映ることである。それゆえ、社会民主党が展開した、外国人による土地購入が「スロヴェニアの独立を危険に晒す」との主張が成り立つわけであるし、同党が主張する旧体制的要素の一扫も、同党の支持者にすれば現実的、具体的な主張なのである⁽⁸⁹⁾。

また第二は、小さな社会における、摩擦を起こさないための人々の慎重な発言、行動と、それに伴うフラストレーションの蓄積である。スロヴェニアにおいては、先にも述べたように、第二次大戦時にいずれの側に立ったかで社会的な優遇や差別が暗に存在しており、また今日では、連立与党の党員に、ポストなどの利益が直接的に配分されている。社会民主党は、かつて社会的差別を受けた人々や、体制変動後の利益分配にありつけなかった人々の公言しづらい妬み、フラストレーションを、その攻撃的、扇動的なロジックによって吸

87 *Kaj hoče Nova Slovenija* (Ljubljana: Grif, 2000), pp. 12-13. および、Rizman, “Radikalna desnica na Slovenskem,” pp. 263-264.

88 第二次大戦末期、国外逃亡に成功し、政治移民化した対占領軍協力者とその家族は約6000人。前述のロデおよびバユックも、幼少であったとはいえ、そのうちの一人である。また、逃亡中にパルチザン側に捕えられ、殺害された者の総数は約1万2千人と推計されている。Drago Jančar, “Slovene Exile,” *Nationality Papers* 21:1 (1993), pp. 99, 103. なお、1990年代、例えばクロアチアの民族主義政権では帰還移民勢力が強い影響力を持っていたが、彼らは元々経済的な移民であり、移民時期も1960年代であった。*Globus*, 28.1.2000, pp. 91-95.

89 この主張の一部は、社会民主党が政権与党であった2000年6月から11月の間に、実際に実行されている。具体的には、前節で述べた各行政機関、公社における幹部の一扫の他、政府による主要紙*Delo*の株買収などである。Vreg, “Volitve 2000,” p. 197. なお当時、コス Marta Kos 経済会議所副会頭は筆者に対し、バユック政権が同会議所を廃止して、自らの息のかかった経済会議所を新規に設立したがっている、と述べていた。コス副会頭とのインタビュー（2000年6月27日、リュブリャナ）。

取し代弁してきたのである⁽⁹⁰⁾。

おわりに

以上、中・東欧の小国スロヴェニアにおける右派政党、社会民主党に関し、その社会民主主義政党から右派政党への転向が、いかなる理由から発生し、また、どのような背景から成功、定着したのかを考察してみた。社会民主党の右派政党化は、有力な反共・民族主義政党が存在しない中、党首ヤンシャが、旧共産主義者同盟系の政党による統治の継続や体制変動後の境遇を不満とする有権者の声に呼応し、同党の舵を反共主義、民族主義に切ったことによって発生した。そして社会民主党は、旧共産主義者同盟系の政党による行政人事およびコーポラティズム制度のコントロールを旧体制勢力による支配の継続であると非難し、また、第二次世界大戦をめぐる世論が極端に分かれる中、パルチザン抵抗運動ではなく対枢軸軍協力を肯定することによって、右派政党として定着した。

社会民主党は、2004年10月選挙の直前まで、旧体制批判、および、選挙制度改革要求の際に見せたレファレンダム戦略を止めることがなかった。2004年4月には同党の署名収集、要求によって、旧ユーゴ他共和国国籍所持者に対する永住権授与法の是非をめぐるレファレンダムが実施されている⁽⁹¹⁾。なお社会民主党は、欧州人民・欧州民主党グループEPP-EDへの正式加盟に際し同グループより党名変更を求められ、2003年9月、党名を冒頭で述べたスロヴェニア民主党に変更した⁽⁹²⁾。しかしこの党名変更まで、社会民主党との名称がついに問題とされなかったことや、同党が上記レファレンダムで訴えた、マイノリティの権利のためにマジョリティの権利が侵される、との主張が幅広い支持を集めていることなど⁽⁹³⁾、スロヴェニアにおいて民主主義は、未だ定着しているとはいえない状況にある。

2004年10月の選挙では、スロヴェニア民主党は29議席を獲得して第一党となった(表7)。選挙後、同党は新スロヴェニア党、人民党、および年金者民主党との間で連立に合意し、ヤンシャを首班とする連立政権が発足した。スロヴェニア民主党が同選挙で勝利を収めた主な要因としては、ロップ前首相に欠けていた強力な政治的リーダーシップに対する有権者の希求、前述の永住権授与法をはじめとする前政権の対旧ユーゴ系移民寛容政策に対するスロヴェニア人有権者の不満、EUにおけるスロヴェニアの政治的経済的自立に対する

90 Peter Jambreč, “Čigav je Slovenska država?” *Sploščena Slovenija — Obračun za prihodnost* (Ljubljana: Nova Revija, 1999), pp. 15-16.

91 同法は、旧ユーゴ解体時、スロヴェニアで長期間居住、労働していながら、スロヴェニア国籍を申請しなかったために、永住権授与対象から漏れていた旧ユーゴ他共和国出身者の救済を図ったものである。対象者は、5千人から1万人の間と見積もられている。社会民主党は、永住権不所持が、スロヴェニア国籍を申請しなかった者の責任であるとして、新スロヴェニア党とともに同法に反対し、レファレンダム実施を要求した。レファレンダムは、投票率31.4% (同法への反対94.7%、賛成3.8%、無効票1.5%)により未成立。“Ne referendum večinsko proti uveljaviti tehničnega zakona,” *Mladina*, 5.4.2004. <http://www.mladina.si/dnevnik/43201/> (2004年6月22日アクセス)

92 “SDS-Slovenska Demokratska Stranka,” 22.9.2003. http://www.sds.si/arhiv_novic_september_2003.html (2004年4月13日アクセス)。この新党名は、定着しているSDSとの略称に合わせたものである。

93 社会民主党は、レファレンダムと同時期、首都リュブリャナにおいて浮上したボスニア人によるモスク建設の問題において、このロジックを再び持ち出し反対している。“Srečanje predstavnikov SDS in Islamske skupnosti v Sloveniji,” 9.1.2004. http://www.sds.si/displayarticles_novice_paza.pnp (2004年8月18日アクセス)

(表 7) 2004 年 10 月の議会選挙結果

政党名	スロヴェニア 民主党	新スロヴェニア党	人民党	社会民主連 合リスト	自由民主党	国民党	年金者民主党	少数民族枠	合計
議席	29	9	7	10	23	6	4	2	90

(出典) Večer, 4.10.2004.

有権者の不安⁽⁹⁴⁾、などが考えられる。なお選挙運動期間中に、国境・領海権問題をめぐって隣国クロアチアとの関係が緊張する事態が発生したが、ヤンシャは同問題に関し発言を差し控えた。しかもヤンシャは、それまでの攻撃的、扇動的な姿勢から一転して寛容で建設的な態度をとり、スロヴェニア民主党が政権党となった場合の重要政策課題を具体的に掲げる選挙運動を展開した⁽⁹⁵⁾。ヤンシャは、首相就任後もこの選挙運動以来の穏健な態度を維持しており、内政、外交とも現在のところは上手く取り仕切っている⁽⁹⁶⁾。こうしたヤンシャおよびスロヴェニア民主党の変化は、一時的であろうかそれとも継続的であろうか。また、それはスロヴェニアの政党政治にどのような影響を与えるのであろうか。筆者としてはこれらの点に配慮しつつ、今後ともスロヴェニア民主党そしてスロヴェニア政治の動向を注意深く見守っていきたい。

- 94 スロヴェニアにおける最近の民族的経済的排外主義を紹介した文献として、Samuel Loewenberg, “Slovenia, Poster Child for the New Europe: Xenophobic, Protectionist, and on the Verge of Economic Decline,” *Posted Friday*, 30.4.2004. <http://slate.msn.com/id/2099689> (2004年11月25日アクセス)。なおヤンシャは、レファレンダム時に永住権授与法に関して、「非スロヴェニア人に対するいかなる権利付与もスロヴェニア国家にとり害である。」と述べている。Vesna Peric Zimonjic, “Slovenes Poised to Reject Citizenship for the ‘Erased’” *Asheville Global Report*, No. 273, 5.4.2004. <http://www.agrnews.org/issues/273/worldnews.html> (2004年11月25日アクセス) またヤンシャは、2004年4月14日にCNNで放映されたスロヴェニア・リポートにて、「スロヴェニア人口の大半は海外からの投資を恐れており、スロヴェニア企業が多国籍企業に買い占められ、職を解雇されるのではないかと懸念している。」と、スロヴェニア人の経済グローバル化に対する不安を説明している。
- 95 スロヴェニア・クロアチア関係は、2004年9月、クロアチア警察がスロヴェニアとの係争海域におけるスロヴェニア漁船に対するパトロールを強化する中、同9月23日、人民党選挙団が国境係争地域のクロアチア側に越境し、クロアチア警察に逮捕されたことによって悪化した。この事件では、前政権が、事態の展開次第でスロヴェニアがクロアチアのEU加盟に反対する可能性もある旨の声明を発表したのに対し、ヤンシャ率いるスロヴェニア民主党は、敢えて事態を静観する姿勢をとった。Večernji List, 25.9.2004. なお、ヤンシャにより提示された政権交代後の政策課題は、行政スリム化、税制改革、教育制度改革など。Michael Manske, “Centre-Right Slovenian Democrats Sweep to Victory at Slovenia’s Parliamentary Elections,” in *Insight Central Europe*, 8.10.2004. <http://www.incentraleurope.com/ice/article/59014> (2004年11月26日アクセス)
- 96 ヤンシャの最近の態度変化については、クーチャン前大統領、ブチャル France Bučar 元議会議長らが指摘している。Sobotna priloga Dela, 23.10.2004. ヤンシャは現在、選挙前とは打って変わって、スロヴェニア民主党にもパルチザン・戦後スロヴェニア支持の潮流がある旨述べたり、少数民族の権利保護の重要性を強調したりしており、新政権下での権利縮小を危惧していた旧ユーゴ系移民を含む少数民族の支持を獲得しつつある。The Centre for South-East European Studies — SEE Security Monitor, 9.11.2004. http://www.csees.net/news_more.php3?nld=38093&cld=7 (2004年11月25日アクセス) こうしたヤンシャの変化に関し、クロアチアにおいてクロアチア民主同盟 Hrvatska Demokratska Zajednica (HDZ) 政権を率いるサナデル Ivo Sanader 首相の例が参考にされているのではないかと筆者は見ている。サナデルは政権交代以来、前政権が国内世論および野党クロアチア民主同盟の反発を恐れて慎重であった、セルビア人難民の帰還や国連旧ユーゴ戦争犯罪国際法廷との協力を積極的に推進しており、これらの問題で現野党に批判の余地を与えていない。Jutarnji List, 17.1.2004. また、サナデル自身が温和で決断力に富むイメージを有し、経済政策も順調に進めていることなどから、サナデル政権は長期政権化する可能性がある。ヤンシャの態度変化は、このサナデル、クロアチアの事例に倣って、自らが率いる政権の長期政権化に向けた布石であるのかもしれない。

Party Politics and Populism in Slovenia: Why Did the Right Turn of the Social Democratic Party of Slovenia Succeed?

SAITO Atsushi

In Slovenia, the first parliamentary election was held in 1990. The coalition DEMOS, which was formed by the newly-founded Social Democratic Party of Slovenia (SDS) and other new parties, won the election. The DEMOS government played a decisive role in the process of the independence of Slovenia from Yugoslavia. The second election was held in 1992. The center-left SDS achieved limited success in this election. Though the SDS was included in the coalition government formed by the Liberal Democrats of Slovenia (LDS, the former League of Socialist Youth), the United List of Social Democrats (ZLSD, the former League of Communists) and the Christian Democrats of Slovenia (SKD, the center- right new party), it considered a merger with the Socialist Party of Slovenia (SSS) for its survival.

However, after the party leader Janez Janša was removed from the position of defence minister because of a military scandal in March 1994, the SDS stepped out from the ruling coalition and abandoned much of its social-democratic platform. The party turned into a rightist party, which strongly emphasized nationalism and anti-communism. The SDS was very successful in this turn, and it has been the strongest opposition party since the 1996 elections. In this paper, the author analyzes the factors that are related to the success of this right turn by the SDS.

The first factor was an intra-party factor, the political leadership of the party leader Janša. As a dissident from the communist time and a hero in the country's bid for independence, he has been regarded as a charismatic leader in Slovene politics. He excels in perceiving public opinion and exploiting it for his political purpose, rather than initiating policies by himself. Thus, he perceived and started to exploit nationalism and anti-communism among people who stood up for him when he was ousted from his cabinet position. The SDS followed him firmly since the party executive backed him, and the greater part of the party were members who newly joined in support of him.

The second factor was an inter-party factor, the close linkage between political parties and interest groups, and the absence of a strong nationalist party. By 1994, the main parties built close relations with their interest groups, for example, the LDS with the capitalist class, the ZLSD with the working class, the SKD with the Catholic Church and the Slovene People's Party (SLS, the center-right party which emerged in 1989 as the former Slovene Farmers' Alliance) with farmers. On the other hand, the far-right in the Slovene political spectrum was vacant at that time due to the split of the SNS (Slovene National Party) into several groups. The SDS, which had failed in getting the support of the working class, used this vacancy and succeeded in approaching the voters of the right.

The third factor was a sociopolitical factor, the control of administrative structure by the government coalition. In Slovenia, various laws and administrative organs were established intensively after independence. Eventually, when the administrative structure was established or reformed, officials were largely recruited from party members of the then government coalition. The LDS, ZLSD and SKD appointed their members as leaders of the ministries. Thus, the government coalition in 1993 gained control of the administrative structure. The SDS, which was ousted from the coalition, started to criticize this control as the restoration of communist power (LDS, ZLSD) with the help of the collaborationists (SKD).

This criticism by the SDS drew the support of the people who didn't enjoy the benefits of the transition.

The fourth factor was an institutional factor, the introduction of corporatism, and the ZLSD's domination over it. In Slovenia, corporatism, which consists of the National Council, the chamber system and social partnership, has been introduced since 1992. By 1994, the ZLSD succeeded in dominating the social partnership, the main institution of Slovene corporatism, through its connections with the government, the trade union and the employers' association. This seemed to be the revitalization of the former system to its critics. The SDS started to demand change in the existing trade unions and employers' association, to draw the support of these critics.

The fifth factor was a historical factor, the split in the Slovene nation over their modern history. During World War II and the Nazi occupation, Slovenes were divided into two sides, the communist-led partisans and the collaborationists. After the end of communist rule, the Catholic Church, on behalf of the collaborationists, started to revise historical events during WWII to justify their past collaboration. Since then Slovenes have once again become divided over their modern history, whether they take sides with the partisans or the collaborationists. The SDS, which was not previously a supporter of the collaborationists, started to advocate them and succeeded in attracting support from them.

The sixth factor was a geographical factor, namely the smallness of the state. With a territory of about 20,000 square kilometers and a population of 2 million, administrative and economic structures in Slovenia are small and simple. Under this circumstance, the SDS's criticism of the heritage of the former regime seemed concrete to its supporters, though it was actually distorted.

In Slovenia, parties form a coalition government based on its proportional electoral system which often does not produce a majority party. The SDS had kept its political influence through criticizing the former communists in power and being in opposition. The SDS became the first party in the parliamentary election in 2004, and formed a coalition government with other rightist parties. Now the question is whether or not the SDS will be able to keep the same political stance as when it was in opposition.